

再論・室町將軍の死と怪異

西山 克

はじめに

私はかつて「怪異学序説」と題した文章のなかで、室町幕府第五代將軍義量（一四〇七～二五）の逝去にともなう怪異について、伏見宮貞成の日記である『看聞日記』応永三三年（一四二五）二月二十八日条などの記事を引用しながら解釈を加えたことがある⁽¹⁾。そのころ私の構想していた怪異学そのものについては、東アジア怪異学会の編集による論文集『怪異学の技法』⁽²⁾および『怪異学の可能性』⁽³⁾によって、なお中間報告の段階ではあるが、それなりに刺激的な成果を提示することができたと思っている。

しかし、『看聞日記』応永三三年（一四二五）二月二十八日条については、前稿「怪異学序説」でその概要をあつかったときから、史料としての位相の複雑さから、いずれは再論すべき記事と考えていた。青年將軍の逝去をめぐる怪異の巷説が、潜在的に皇統の一翼をになう伏見宮家の正統をついだ記録者＝貞成のフィルターを通過する以前に、室町殿義持在世時の政治的構造のなかで、あるいは状況のなかで、時の権力とどのように関わりつつ流布していたのか。受容した京都の都市社会は、地理的に王権を包摂するものとして、この怪異の巷説にどのように関わったのか。寺社勢力、とくに神祇の世界は怪異の巷説に不可分な関係をもっていたように見える。なぜ神祇なのか。

——課題とすべきことは様々ある。

室町殿義持とその時代については、近年、急速に読み直しが進んでいる。父義満の構築した政治構造や宗教戦略への回帰——特に「室町殿」義満期への回帰が指摘されると同時に、後小松院政との協調関係が語られるなど、義満・義教期のはざまにある義持期の独自の相貌が浮かび上がっている⁽⁴⁾。

そのような義持期の国家・王権と怪異との関係は、恠異学会が主張してきた怪異のポリティカルな性格からしてけっして無縁なものとは考えられないが、それを全面的に論じる余裕はいまはない。この点は後日を期すことにしたい。

しかしつぎのことにだけは留意しておく必要があるだろう。本稿が扱う五代將軍義量の不慮の死は、応永三年の出来事であった。室町殿義持はその二年前に出家している。出家後の義持が、国家的な宗教政策ではなく、個人的な寺社信仰にのめりこんだことについては、大田壮一郎氏による的確な指摘がある⁽⁵⁾。

出家後の義持については、ともかく仏神事の量的拡大という以外に政策上の方向性を見出し難く、それは義持初政とはまったく対照的な姿であったといえる。

もともと「過剰」な公武祈禱はさらにその頻度を増やし、既成のシステムでは対応不能な状況に陥っていた。

応永三年が義持にとつてどのような年であったのか。大田氏の指摘に留意したうえで私の宿題をはたしておくことにしたい。再論としての性格上、記述が前稿と重複することがある。寛恕頂ければ幸いである。

一、將軍義量の死

応永三年（一二二五）という年は、諸階層の日記に書きとめられた怪異記事に関するかぎり、二月二七日夕刻の

義量急死という事件さえ起こらなければ、その前後でとりたてて特異な性格を持つ年ではなかったように思われる。たとえば『満濟准后日記』同年一月三〇日条には、つぎのような記事が見えている。

今月六日山門横川飯室不動堂廻祿云々、草創以來于今無為堂云々、本尊不動定肇五代祖定善作云々、本尊ノ御身ニ金銅鑄不動被納云々、此銅不動ハ無子細自灰燼中尋出云々、次今月廿三日大宮御殿上ニ首无猿死テ在之云々、凡大宮御殿ノ上ニ猿ノ上ルハ怪異也、内野合戦等時如然云々、今度体先規未聞之由、證憲法印等申、珍事々々、比叡山横川の飯室不動堂が焼亡したこと、日吉大社大宮御殿上に首のない猿が死んでいたこと——などが記録されている。飯室不動堂の焼亡については、本尊の胎内に納入されていた金銅製の不動明王が燃え残り、灰燼のなかから見つかったというのであるから、むしろ秘仏の奇瑞に関するものである。それに対して日吉大宮の首なし猿の記事は、「内野合戦（明徳の乱）等の時、然るが如し」とあるように、禍々しい戦争Ⅱ凶事の予兆として捉えられており、明らかな怪異記事である。

しかし室町期の怪異記事一般の定型を踏んでおり、少なくとも怪異記事として特異ではない。事態が激変したのは、応永三年（一四二五）二月二七日の夕刻に、義量が一九歳の若さで他界したためである。その兆しは前年からあった。たとえば『満濟准后日記』応永三年六月一四日、祇園会が行われた日の記事——。

祇園会於右京大夫亭御見物如恒年、今日依仰俄出京、御出以前參御所、御対面、御方御所様御痢病氣、此七日計御座、但於今御減也、雖然御邪氣〔之氣〕時々御発、次ニハ故林光院御事、連々被仰出云々、仍若左様御怨念モヤト被仰出云々、御祈禱事、別而御沙汰有度由被仰談、次ニハ此間御加持ニ參スル弁覺僧都〔青蓮院出仕〕野狐仕由風聞、大略無其隱由被聞食及、可為何様哉由也、予申入云、御祈事ハ凡無間斷御沙汰旁可宜事也、……次ニ弁覺僧都事、如被仰出方々、其沙汰勿論候、但実説未承定間、于今不達上聞候キ、所詮如此無覺束上ハ、御加持可被停止条、可為簡要旨申入了、次林光院御事ハ、誠御執心モ勿論由覺候、只可被訪申条第一御事候歟旨申、

林光院足利義嗣の怨霊や野狐使いの話題が、義量の病状との関連で取り沙汰されている。「御方御所」義量は一週間ほど痢病をやみ、いくらか病状が回復したところで、意識障害をひきおこし、うわごとを言い続けた。そのうわ言のなかに、かつて父義持の肅清した義嗣の名が繰り返しあらわれたのである。

一方で、この邪氣が青蓮院出仕の験者弁覺僧都が野狐を使ったからであるという風聞も流れている。記録者である満済の戸惑いが行間から滲み出ているようであるが、野狐使いの摘発は、室町時代の宮廷社会において未熟な医療を隠蔽する単なる責任転嫁ではなかった。それはある種のシステムであったとも言える。王権周辺の精神障害が狐憑きと判定されると、狐使いを摘発することによってその治療を完遂することができたのである。それが精神障害の社会的な落としどころであったと言い換えてもよい⁽⁶⁾。

しかし義量は回復することがなかった。このとき、義量の父である室町殿義持はなお健在で、時の国家や王権にただちに激震がおよぶことはなかった。しかし最大の問題は義持に義量以外の男子がなく、また義量にも継嗣が存在しなかったことである。青年將軍の若すぎる死は、当時の政治秩序に、その崩壊を予見させるような不安定なゆらぎを持ち込むことになった。

『看聞日記』応永三二年（一四二五）二月二八日条の前半部分に、義量の急死についてのつぎのような記事がある。

參義量
室町殿

將軍他界実事也、昨夕云々、為天下驚歎、両三年内損、此間興盛種種被尽祈療、然而無其驗遂被墮命、当年十九歳也、尤可惜々々、室町殿於于今無一子、將軍人跡忽闕如、天下惣別驚入者也、茶毘明日於等持院可有沙汰云々、御台母儀不堪悲歎、存命不定云々、公家武家俗侶馳參、都鄙騒動也、

將軍・參議右中將義量の他界は本当のことであった。昨夕のことであるという。みんな驚嘆している。この二・三年、彼は内臓を痛めていろいろ祈療を尽くしたが、その成果もなく、ついに命をおとしてしまった。まだ一九歳、惜

しいことである。室町殿にはもう一人も子どもがいないのだ。將軍になる人がいなくなってしまった。天下はみな驚き入っている。茶毘は明日、等持院で沙汰されるという。室町殿の御台所（將軍の母である）は悲嘆のあまり、その存命すら定かでないらしい。公家も武家も俗人も僧侶も馳せ集まり、都も田舎も大騒動となっている……と。

要するに義量は、大酒によるとおぼしい内臓疾患に悩まされ、さまざまな祈禱が施された。しかしその効果もなく、ついに命を落とした。室町殿義持には義量以外に男子はなく將軍継嗣がたちまち不可能な状態となってしまったのである。遺骸は二九日に、室町將軍家の菩提寺として崇敬された等持院で茶毘にふされることになった。

公武統一政権の中枢に風穴があき、行き先の見えない將軍空位時代が始まった。「室町殿今に於いて一子なし」という緊迫したフレーズが、貴族・廷臣たちの間で不吉な合言葉のように繰り返えされる。たとえば実務官僚中原師郷の日記『師郷記』、その同二七日条にもつぎのような記事がある。

今日未剋許、征夷大將軍御方御所薨去^{御年十九}、此間御病氣也、言語道斷重事、諸人驚嘆、不及是非、室町殿御一子大方無申限之次第也、諸人不及參御訪、御所先御座等持寺^{々々}、

青年將軍義量の死と政權に与えたその衝撃が、ここでも簡略な言葉のうちに書きとめられている。そのなかの一文「室町殿御一子大方申す限りなきの次第也」が、伏見宮貞成の書きおいた「室町殿今に於いて一子なし」の不吉なフレーズと呼応していることは明らかだろう。

あるいはまた朝儀典札に詳しく、後に武家伝奏にも任じられた中山定親の日記『薩戒記』の同日条にもつぎのような記事がある。

今日申剋征夷大將軍參議正四位下行右近衛權中將兼美作權守源朝臣義量（春秋十九歳）薨去、日来不例、内損、又怨靈（故入道大納言義嗣卿以下）所致云々、入道前内大臣御一子也、於于今者更無相續之人跡、一天重事、万人愁傷也、

『看聞日記』や『師郷記』で明示されない怨霊説が書きとめられているのは重大で、室町殿義持は以後、彼自身が屠った弟義嗣らの怨霊に悩まされ続けることになる。見てのとおり、この定親の日記のなかにも、「今に於いては更に相統の人体なし」のフレーズが書き込まれているのである。

室町殿義持にはもはや一子とてなかった。院政の主宰者である後小松院——そして称光天皇の治世下で、室町殿義持は公武の主従関係の頂点に立っていた。国家財政も軍事も義持なしには動かなかったのであるから、その唯一の後継者の突然の死をめぐって、幕府・宮廷社会を覆った危機意識については、想像するに余りある。

正統的な室町將軍の系譜が絶えるかもしれないという異常事態のなかで、チマタではさまざまな流言が飛び交った。伏見宮貞成は義量逝去の記事に続いて、そうした流言の数かずを奇妙な情熱をこめて書き記している。貞成の書き記した風聞巷説の記事をいくつかに分節し、記号・ナンバーをつけて引用してみる。

〔Ⅰ〕 当年相当三合、此歲天下必有凶事、自往昔度々例天下重事不可勝計、仍自旧年諸門跡御祈禱事被申云々、然而無其驗歟、既二宮御事、將軍連統、天下又大乱風聞旁呈凶事了、

〔Ⅱ〕 正月中種々恠異風聞巷説雖難信用聊記之、

① 正月一日早朝、大雨雷鳴、其時分勘解由小路武衛屋形棟上二甲降下、銘將軍ト書云々前管領
此事大ニ不審、定虚説、
歟、武衛堅隠密云々

② 其後
月日不聞、甲斐宿所へ僧一人太刀持参申云、八幡参籠之時、此太刀是へ可持参之由蒙靈夢了、夢覺太刀現形不思議之間持参之由申、甲斐若党比興イタカ之由申、太刀不請取追返了、然而不思議之間、又被僧召返太刀ヲ請取、事子細猶欲相尋之處、カキ消之様逐電、如何ニ尋とも行方不知、件太刀武衛先祖七条入道太刀也、八幡ニ奉納太刀也云々、此事実説云々、猶不審々々、

③ 正月一日、室町殿北野へ社参、宮廻之時、御殿内有声、当年御代可尽云々、又北野ニ鶏物ヲ云、今年御代可尽、主上可崩御云々、此鶏被流捨云々、

④又管領畠山厩馬物ヲ云、只今ニ骨ヲ折ヘシ、能々可養云々、其時厩馬共同様ニイナ、クト云々、

⑤又正月一日、將軍室町殿御前ニ被參之時、鳩二来喫合ニ死云々、

⑥同中旬之比、天狗拍物ヲシテ夜々クルイ行云々、

⑦又華王院夢想ニ神祇官ト覺シキ所ニ諸神会合、一座人云、將軍代欲尽、諸神已捨給了、但北野未捨給之由被申ト蒙夢想云々、仍披露申、北野可參籠之由被仰云々、

⑧又去比、日吉大宮社頭ニ頭モナキ猿ニ死テアリ、此社檀ニハ猿不入、惣シテ鳥獸も不入云々、不思議事也、

⑨又二月將軍病氣已火急之時、室町殿寢殿棟瓦ノ上ニ白羽ノ箭一筋立、其箭紙ニテ羽ヲハク、篲ハ筆也云々、瓦ノ上ニ立事、殊不思議云々、其後無幾程將軍死去云々、

⑩雨降入夜暴風甚雨、雷鳴、後聞、大風雨之時分、神祇官松明おひた、しくみえて、四五千人許相集、暫有テトツト咲テ退散、松明火人ニ見之実説也、諸神会合歟、天狗野干所為歟、不思議也、

謳歌説事々不足信用、雖然天下風聞説大概記之、

ちなみに、〔Ⅱ〕の⑩としてあげた記事は、『看聞日記』二月二八日条ではなく、翌二九日条に書きとめられたものである。ただ、内容的には二八日条と一括しても不自然ではないので、ここではあえて同条に挿入し、足利義量の逝去をめぐる『看聞日記』の記事の全体を解説すべきテキストとして解説の組上に載せてみることにしたい。

室町時代の公武統一政権の中枢が多彩な怪異に彩られていたことは、この記事を一見するだけであきらかである。いかに記録者貞成が巷説好きであるにしても、この風聞巷説の量はただごとではない。室町時代の首都社会には、現代のワイドショーを凌駕するほどの怪説奇説があふれかえっていた。

ただし〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕の部分は記事の性格に違いがある。この応永三三年が歴注にいう三合の年に当たるというこ

とは、当時の「科学的」知識に基づく事象で、まったく偶発的な出来事ではなかった。陰陽道の研究者である小坂真二氏の論文「三合の算出法について」を見ると、三合について、

三合とは、隋唐志の五行家類に属す黄帝九宮經等の所説に基づく、九合（八卦八宮と中央宮）十二神のうち太歳・太陰・害気の三神の相合のことであり、この三神の相合する年（三合歳）には風水旱・疾疫・兵革等の種々な災害が起るとされ、奈良時代以後改元の理由となり、またしばしば天皇の施徳・祈祷の対象ともなっており、政治思想上重要な役割を果たしたものである。

と書かれている⁽⁷⁾。太歳、太陰、害気の三神が相合するのが三合で、その年は洪水・旱魃・伝染病・戦争など、あらゆる災害がおこると考えられていた。三合を決定するには複雑な計算式があり、小坂真二氏によると、その年は九年ごとにあらわれるという。つまり応永三十二年が三合の年であることは風聞巷説の類ではなく、当時の「科学的」な常識として語られていたことなのである。

〔一〕で、当年（応永三十二年）は三合にあたる、この年は天下に必ず凶事がある——と書かれているのは、そのような理由がある。その三合に対処するために、前年より諸門跡で祈祷が行われていたのである。何事も起こらなければ、導師の験力、祈祷の効果が賞賛されたであろう。が、事態は期待通りには進まなかった。院政の主宰者後小松院の第二子小川宮が二三歳で亡くなり、続いて將軍義量も逝ってしまったのである。この二人の若者の早すぎる死は、二人の父、後小松上皇と義持にとって、たしかに致命的なつまづきの石となった。

義持のただ一人の男子、義量についてはいま問題にしている。後小松上皇の第二子小川宮についてはつぎのような事情があった。当時の天皇称光は後小松院の継嗣として即位したが、病弱で、しばしば精神障害の徴候を示すことがあった。称光天皇の先行きに不安を感じていた人びとは、後小松院の第二子にして「儲君」、小川宮に期待するとこるが大きかった。その小川宮が急死してしまったのである。中山定親の日記『薩戒記』に「御毒を聞こし食すか」と

書きとめられているように、その早すぎる死に対しては、毒殺の可能性すら囁かれた。

称光天皇は正長元年（一四二八）七月二〇日に崩御する。その際、後小松院は『看聞日記』の筆者伏見宮貞成の皇子彦仁王を猶子として即位させた。後花園天皇である。持明院統の内部で後光厳―後円融―後小松と続いた皇統は、ここに断絶する。以後、皇位は後花園天皇の子孫に伝えられ、二一世紀の現代に至ることになる⁽⁸⁾。

もともと後光厳流の皇統は伏見宮家を皇位から遠ざけることでその正統性を維持してきた。後光厳天皇の兄崇光が皇位を退いたあと、伏見宮家の祖栄仁親王、その子貞成は皇位につけないままに、称光天皇の時代を迎えていたのである。もしも称光天皇が病弱でなければ、あるいは小川宮が急死しなければ、伏見宮家に天皇位が渡ることは二度となかったかもしれない。小川宮と称光天皇の死によって、みずからの血統の終わりを確認せざるとえなかった後小松院の無念さは想像するにあまりある。

要するに、後光厳流の皇統の断絶にいたる流れが、応永三二年、この三合の年に決定的となったのである。そしてそれは、室町殿義持の正統を継ぐ唯一の後継者の死とおなじ年のうちにおこった。「チマタには大乱の風聞が流れており、いずれにしても天下は凶事を呈している」という『看聞日記』の感慨は、圧倒的多数の人びとの思いを代弁するものであつたらう。

一方で〔Ⅱ〕については、当時の「科学的」知識には馴染みがたい、まさに風聞巷説を集成したものであつた。風聞巷説は中世以前における史料伝来の原則から甚だしく遠い。一般に史料は特定の団体・家を利するものである。その権利やプライドを保証するものだけが自覚的に残される。しかしいま私たちが前にしているのは、ただの風聞巷説にすぎないのである。ひとまず、特定の家にも個人の利害にも関わりなく、これらの史料は書き残されている。

ただこれはメディアである。風聞巷説の発信者――政権中枢・有力守護・寺社・都市民など――が推定される場合であろうと、なかりうと、風聞巷説には情報が織り込まれ社会的な認知にむかう性格をもっている。正確には、認知

のための判断を享受者に求める性格をもっている。

歴史学が社会的コンテキストを解説しようとするときに、風聞巷説は極めて有用なものであろう。もちろん記録者である伏見宮貞成のフィルタをどのように腑分けするかという問題は残されている。しかし、いま問題にする記事については、記録者本人が謳歌の説はどれもこれも信用するに足りないと言っているのである。歴史学にとってこれほど有難い史料はない。

以下、国家体制や社会秩序の不気味な崩壊を暗示するような巷説のなから、特に二つの言説を取り出してみる。將軍義量逝去の予兆、室町殿と神祇、この二つである。

二、風聞巷説を読む

〔將軍義量逝去の予兆〕

義量が逝去する直前の『看聞日記』に、つぎのような奇妙な現象が書きとめられている。そこに書きとめられた記録者の解釈は、内臓疾患による義量の急死によって永遠に宙ぶりの状態となる。応永三二年（一四二五）二月一四日条である。

抑此間御所旧跡馬場（昔御藏跡云々）、蟾ヒキガエル幕数千出で田中二入、大少不知其数云々、帰路其跡見之処、蛙於于今

不見、此事佳瑞也、近比有吉例、應永十五年自室町殿蟾幕数千万出了、不經幾程將軍執天下、尤吉事也、

義量逝去のわずか二週間前の記事である。特に傍線を付けた箇所に注意していただきたい。応永一五年（一四〇八）、室町殿より数千万のヒキガエルが這い出した。幾程もなく將軍が天下を掌握した。ヒキガエルの出現は吉事である、と。

このときの室町將軍は義持である。義持の將軍位襲職は応永元年（一三九四）一二月のことであるが、全盛期の父義満が王権の実質を掌握して、義持は天下の覇権から遠いところにいた。弟義嗣の存在も義持の未来を不確定なものにしていた。その義持が応永一五年五月に突如として自由になった。父義満が死んだのである。「將軍執天下、尤吉事也」と表現されている背後に父義満の逝去が想定されているところに、この親子の複雑な関係が透けてみえているが、そのことはよい。問題なのはカエルである。

応永一五年当時、リアルタイムに日記を書いていた貴族山科教言は、その日記『教言卿記』の同年二月六日条に、「ヒキカヘル新御所（室町第）東門前ヨリ大場二百千アリ云々、陰陽師ニ被尋也」という記事を書きとめている。

義満急死の三ヶ月前に、室町御所から大量のヒキガエルがたしかに出現していたのである。もちろん自然現象であり、御所の春先の池で生まれた子ガエルであろう。『教言卿記』によるとヒキガエルの数はじつは「百千」であつて、貞成の数千万がとんでもない誇張であつたことがわかる。

が、そのことはよい。問題なのは王権である。繰り返すが、春先における大量の蛙の出現は自然現象に過ぎない。しかしその現象が王権の周辺に立ち現れると、それは瑞祥あるいは怪異となる。この構図は董仲舒的な天人相関説における瑞祥・災異の枠内にあるともいえる⁽⁹⁾。実例は枚挙にいとまない。ここでは些か性格の異なるつぎの記事を提示するのにとめておこう。『長興宿禰記』文明一四年（一四八二）八月一二日条である。

後聞、今夜室町殿不思議有怪異、御母儀^{一位}殿、御方御倉前庭、有合戦声兵具打合音令騒動、番衆輩奔散令驚之处、無人一向無其形^{云々}、陰陽賀安両人、被召占文、安三位有宣為吉事之由勘申、賀三位在通^(土御門)以外御愼之旨、進占文

云々、

室町殿は將軍足利義尚、御母儀一位殿は日野富子をさしている。御方御倉の前庭で合戦の声、兵具を打ち合わせる音が聞こえ、騒動となった。幕府は陰陽師の土御門有宣と勘解由小路在通に占わせたが、二人の占文は全く逆の内容

となっていた。有宣は吉事と勘申し在通は御愼と勘申しているのである。

室町殿のヒキガエルの一件で、重要なのは『教言卿記』が「陰陽師に尋ねらるるなり」と書いているように、当時からこれを怪異とみなす人々がいたことである。陰陽師はこれが怪異なのかどうか判定し、もし怪異ならば何の前兆なのかを勘申する。

残念ながらその勘申結果は知られない。少なくとも貞成は、これを義持にとつての吉事と解釈していた。その吉事を先例にして、貞成は新たなヒキガエルの出現を嘉瑞と捉えたのである。しかし現実には貞成の解釈を裏切った。二週間後に將軍義量が死んで、天下は凶事を呈することになる。記録者の解釈が永遠に宙ぶりの状態となったと書いたのはそのことである。

他方で凶事の予兆もあった。応永三二年の正月一日、室町殿義持の御前に將軍義量がやってきた。もちろん年賀の挨拶のためである。⑤にあるように、そのとき二羽の鳩が飛んできて、突きあい二羽とも死んでしまったという。鳩の喧嘩はありえるだろう。しかしそれによつて共倒れに死んでしまうということがありえるのかどうか。常識的には考えがたいだろう。

問題なのは、鳩、それもつがいの鳩とは何かということである。言うまでもなく、それは八幡信仰の表象であった。早くからつがいの鳩の向きあう姿が、固定した意匠としてアイコン化され、官軍に与えられる錦の御旗を飾ることすらあった。もとは石清水八幡宮の鎮座する男山を、別名「鳩が峰」と読んだことから起こった信仰であろう。

室町將軍家も武門源氏以来の伝統に基づいて八幡神を氏神とみなしたから、当然、つがいの鳩に様々な意味づけを行うことになった。つがいの鳩の共倒れの死は、將軍の死、あるいは室町殿義持を含む將軍家の自滅的な崩壊の兆しとして理解されたに違いないのである。

このような怪異の頻発をうけて青年將軍が逝去したのか、將軍逝去をうけてそのような怪異が想起されるのか。時

間の順序は正確ではない。しかしいずれにしても、室町時代を生きた人々の心性のなかでは、義量は頻発する怪異のただなかで死んだのである。

〔室町殿と神祇〕

応永三二年の正月一日は、季節的には珍しい雷雨で明けた。①によると、その時分に勘解由小路武衛——前管領斯波義淳——の屋形の棟の上に甲が降下した。その甲には銘文があり、將軍と書いてあったのである。斯波義淳を義量の後継に擬す巷説であろう。斯波氏は室町將軍家と同族。足利一門のなかでも格式が最も高く、義淳の祖父高経までは足利氏を名乗っていた。室町殿義持にもはや男兒がない以上、足利嫡流家と家格に遜色のない斯波氏を、新たな將軍家に擬しているのである。権力闘争の兆しをふくむ危うい噂と言うべきだろう。

斯波義淳については、さらに手の込んだ巷説も流れていた。②によれば、義淳の家臣甲斐某の宿所へ一人の僧が太刀を持参してあらわれ、つぎのように語ったというのである。石清水八幡宮に参籠しているとき、甲斐の宿所に太刀を届けるよう夢告を受け、目覚めると実際に太刀が出現していた。「武衛先祖七条入道」が石清水八幡宮に奉納した太刀——。

七条入道は斯波高経（一二〇五～六七）、「甲斐」は斯波氏の家臣である。かつて石清水八幡宮に奉納された先祖斯波高経の太刀が甲斐の宿所に届けられたのは、天下の軍事指揮権を八幡大菩薩が斯波義淳に委ねたことを意味するだろう。しかもそれは先祖斯波高経の秘められた野望の成就として捉えられている。もちろん天下の覇権への野望である。伏見宮貞成の記述は「実説だという」と「なお不審」のあいだを揺れている。しかし「実説」と考えるのであれば、幕府内部のただの奪権闘争ではすまない事態も想定されていることになる。

ちなみに、太刀を持参した僧が甲斐の若党から「イタカ」と罵られていることは興味深い。イタカは異高などと書

かれることもある。京都五条橋の下などで卒塔婆に戒名を書いて死者を供養し、死霊を管理し、口寄せを行う民間宗教者で、狐を使うこともあった。それが得体の知れない他人を罵倒する言葉として使われているのは、彼らが社会的な賤視の対象だったことと関係がある。

ともあれ、ワイドショー的な巷説の氾濫のなかで、斯波高経や義淳の名前が浮上していたことは、幕府権力の内部事情に精通する何者かが、この噂の流布にかかわっていたことを示しているのかもしれない。甲降下の怪異を「堅く隠密す」と言われた斯波義淳の立場は複雑だったであろう。たとえ根も葉もない巷説でも、それが政治情勢に何らかの影響を与えることも考えられるからである。

このころ、ときの管領畠山満家が義淳の対抗馬と見なされていた。^④の記事によれば、その畠山満家邸の厩の馬が人語で「只今ニ骨ヲ折ヘシ」と言い、ほかの馬も一斉にいなないたという^⑤。幕閣内部の緊張関係が見事にあぶり出されているというべきだろう。斯波義淳への王権神授的な巷説に対して、畠山満家に対する噂は辛辣である。怪異の巷説に仮託して、明快な政治的主張——あるいは期待の表出——がなされているようにも思える。

王権神授というテーマに関しては、^⑨の段を取り上げることもできるかもしれない。この年の二月に、將軍義量の病状が危機的な状態に立ち至ったとき、室町殿義持の寢殿の棟瓦のうえに白羽の矢が立ったという。そもそも堅い瓦に矢が立つというのも不思議であるが、それ以上にこの矢は常識はずれの姿かたちをしていた。鳥の羽のかわりに紙がつけてあり、鏃の部分がたぶん筆になっていたのである。

この噂の意味するところは少々わかりにくい。筆と紙が与えられているのだから、義持に後継者を指命せよということなのだろうか。こうした巷説には何か典拠^⑥ 故事の裏付けがあるようにも思うが、私はまだその典拠を発見できていない。

いずれにしても公武政権の中枢に位置する室町殿の系譜が、後継者の病死によって断絶するかもしれないという危

機に際して、一見荒唐無稽に見える流言飛語のなかにも王権神授的な思想が鮮明に姿を現してくるのである。公権力は人智を超えた何者かによって保証される。その何者かは神々であつて仏菩薩ではなかった。

つぎに③の記事を見よう。室町殿義持が北野天満宮に初詣に行き、宮廻りをしていたとき、御殿のなかから声が聞こえて、「今年で御代が尽きるだろう」と言つたというのである。北野社の本殿は多くの堂社によって取りかまれていた。宮廻りは左回りにその堂社群を巡拝しながら歩くことで、この時代の北野社ではマニュアル化した宮廻りの次第も成立していた。

義持が聞いたという声が北野天神の託宣として構想されていることは言うまでもないだろう。しかしこの場合の「御代」が天皇のそれなのか、室町殿のそれなのか、將軍のそれなのか、これだけではわかりにくい。そこで噂に尾鰭がついてくる。北野社の鶏が不吉な予言を語つた——と。予言の中身は室町殿の逝去でも將軍の急死でもなく、「主上」称光天皇の死であつた。

はやくから精神障害の兆候を見せていた称光天皇の死は、実際には応永三五年（一四二八）のことである。だからこの予言は厳密には実現しなかつたと言つてよい。しかし〈御代が尽きる〉の表現のなかには、王権の衰微・王者の死去・社会の混乱への言いしれぬ不安と、代替わりへの裏返しへの期待感がひそんでいるようにみえる。王者の不慮の死の向こう側に見える風景は、いつもそのように両義的なものだ。ワイドショー的な巷説のなかで、そのような不安と裏返された期待の対象が、病弱な称光天皇にしばられていったのは、状況としては当然のことであつたように思う。しかし現実には死去したのは若い將軍の方であつた。社会不安の醸成という意味で予言は半ばは外れ、半ばは成就したというべきなのかもしれない。

それにしても、予言獣はなぜ人間の神主でもなく巫女でもなく鶏だったのか。応永三二年（一四一六）から九年前の春に、大聖歡喜天の神体である二股の杉に怪鳥が止まつて鳴いたことを想起してみよう。北野社に出現した奇怪な

鳥——。ギリシア神話のキメラのような幻獣。宝殿内に参籠通夜する人々が肝をつぶしたその鳥は、頭が猫で身が鶏、尾が蛇という姿をしていた。この場合、頭と尾をのぞく本体が鶏であることには注意がある。その悪魔的な身体は、じつは鶏として構想されているのである⁽¹¹⁾。

どうやら中世の北野社では、鶏が聖なる靈獣と見なされていたらしい。日吉大社にとつての猿や春日社にとつての鹿のように。しかもそれは両義的な性格を持っていた。北野天神の化身として不吉な予言を語ることあれば、猫や蛇と合体し、魔物化して社頭を揺るがすこともある。今年で御代が尽き、主上が崩御するだろうという鶏の予言は、そのような北野信仰の文脈から語り出されたものであった。

さて、義量逝去をめぐる一連の怪異記事のなかに、もうひとつ北野社が問題となるものがある。⑦の語りである。このシーンには、北野天神と室町殿との蜜月的な関係が、より直截に書き記されている。話は華王院と称する人物の夢想を室町殿義持が聴いたという設定で進められる。

華王院の夢想とは、宮中とおぼしいところで神々が会合しているという夢である。その会合の一ノ座、すなわち最も上座にすわっている神が、「將軍義量の代が尽きようとしている。諸神はみな彼を見捨てている。ただし北野天神だけはいまだ義量を見捨ててはいない」と語ったというのである。それを披露された義量の父義持は、義量の生存に一抹の希望を抱いたのであろう。北野社に参籠すると言った、という。すべての神々が見捨ててもなお將軍義量を見捨てることのない神。北野天神——。

義量の逝去という歴史的現実からすると、義量と北野天神とのこの遭遇には、奇妙に不吉な匂いがする。この不吉な話形にはじつは先例があった。『平家物語』巻第五、物怪之沙汰のつぎのような語りである。

又、源中納言雅頼卿のもとに候ける青侍が見たりけるゆめもおそろしかりけり。たとへば大内の神祇館とおぼしきところに、束帯たゞしき上臈たちあまたおはして、儀定の様なる事のありしに、末座なる人の、平家のかたう

だとするとおほしきを、その中より追ッたてらる。かの青侍夢の心に、あれはいかなる上臆にたましますやらんと、ある老翁にとひたてまつれば、嚴島の大明神とこたへ給ふ。其後坐上にけだかけなる宿老の在ましけるが、この日来平家のあずかりたりつる節斗をば、今は伊豆国の流人頼朝にたばうずる也と仰せられければ、其御そばに猶宿老の在ましけるが、其後はわが孫にもたび候へと仰らるゝといふ夢を見て、是を次第にとひたてまつる。

節斗を頼朝にたばうとおほせられつるは八幡大菩薩、其後はわが孫にもたび候へと仰られつるは春日大明神、かう申老翁は武内的大明神と仰らるゝといふ夢を見て、これを人にかたる程に、入道相国もれ聞いて、源大夫判官秀貞をもッて、雅頼卿のもとへ、夢見の青侍急ぎ是へたべとの給ひつかはされたりければ、かの夢見たる青侍やがて逐電してんげり。

源中納言雅頼卿に仕える青侍―青い袍を着た六位の侍―の見た夢も恐ろしいものであった。大内裏の神祇官と思しところ、束帯を正しく身に着けた貴人たちがたくさんおいでになって、議定をしている様子であったが、その末座にいて平家の味方をしたと思しい人が、その場から追い立てられてしまった……と。

中納言雅頼（一一二七―一一九〇）は村上源氏、具平親王四代の孫で源雅兼の子。嘉応元年（一一六九）から治承三年（一一七九）まで中納言の要職にあった。頼朝の側近である中原親能が雅頼の家人であったために、治承四年に平家方から尋問を受ける（『玉葉』同二月六日条）など、源氏に近く、また摂関家にも近かった。

大内裏の神祇官と思しい場所での出来事であったと物語は語っている。源中納言雅頼卿の青侍が見た夢は、これ以上ない舞台設定と登場人物と、それに神話的な筋立てを持っていた。青侍は夢のなかで一座の老翁に、追い立てられた貴人について、あれはどういう人なのかと問うている。老翁の返事は意味深長なものであった。その貴人が嚴島大明神だというのである。

世俗の権力の変遷を、背後で支える神々の力関係の変遷として捉えるこの未来記的叙述は、八幡大菩薩と春日大明

神の相次ぐ登場によって、この語りの持つ、時代の変革を照射する射程の長さを顕わにすることになる。

神祇官の会合の場、その上座には八幡大菩薩が座っており、日頃平家の預かっていた節刀を、伊豆の流人源頼朝に賜おうと仰せられた。そのとき、傍らにいた春日大明神が、その後はわが孫にもと仰せられたというのである。

国家的な軍事指揮権のシンボルとしての節刀が、八幡大菩薩の意志によって平清盛から源頼朝へ、そして摂関家へと移動してゆく。源頼朝の覇権と源氏三代の滅亡、摂家將軍の登場という未来の年代記が、神々の約諾という枠組みをまとって、予言的に語られているということだ。

『看聞日記』 応永三年二月二十八日条における『華王院』の夢想は、この『平家物語』物怪之沙汰の話型を下敷きとしている。少なくともこのような話型の存在を前提にして語られている。『平家物語』における青侍の夢想では、神祇官と思しき場所に会合した神々は、厳島大明神を例外としてすべてが平家を見捨てる。

『平家物語』における厳島大明神の役割を担っているのは、『看聞日記』の巷説における北野天神である。厳島大明神―清盛、北野天神―義量のアナロジーが話型の類似を支えているわけだ。しかし結論は同じではない。『平家物語』が厳島大明神の追放と軍事指揮権の予定調和的な移行を語るのに対して、ことの結末（未来図）が見えていない『看聞日記』の場合は、ただ北野天神の加護が語られるのみである。

その意味では、②における軍事指揮権の移行も、『平家物語』の話型の別れとして語られているのかもしれない。八幡大菩薩は「節斗（刀）」を斯波義淳に下賜する。死霊や狐魅を管理する賤視された職能民であったイタカのような僧侶を介在させるなど、相応の潤色を帯びた記事ではあるが、いずれにしても八幡大菩薩が軍事指揮権を他者に委ねる構図は『平家物語』の未来記に酷似している、と言ってよい。

もともと、太刀は王権によって下賜される節刀ではなく、斯波義淳の先祖高経が八幡宮に奉納したものであったという。先述したように將軍職に対する高経の野望の再現が想定されているわけだ。

王権神授の構想が巷説の流布を支えている。しかし――。

しかし、未来の年代記が神々の約諾という枠組みをまとして、確乎として提示される『平家物語』物怪之沙汰の語りに対して、『看聞日記』の書きとめた巷説が何か不吉な相貌を帯びるのはなぜだろう。

おわりに

青年將軍の逝去をめぐる怪異の巷説が、潜在的に皇統の一翼をになう伏見宮家の正統をついだ記録者＝貞成のフイルターを通過する以前に、室町殿義持在世時の政治的構造のなかで、あるいは状況のなかで、時の権力とどのように関わりつつ流布していたのか。受容した京都の都市社会は、地理的に王権を包摂するものとして、この怪異の巷説にどのように関わったのか。寺社勢力、とくに神祇の世界は怪異の巷説に不可分な関係をもっていた。なぜ神祇なのか。

本稿のはじめにでこのように述べながら、当該記事の読みにこたわり、課題には正面から触れずじまいに終わっている。密教が天皇位の世襲の保障に重要な役割をはたすとしても、室町殿と院政の主宰者、そして天皇との関係性のなかに定位する当該期の王権は、神祇の世界と濃密な関係をつくりだしていた。しかもその濃密な関係は王権の衰微という方向性にシフトしている。

青年將軍の急死が室町殿義持の未来を空白にしてしまった。歴史が次にどのような一手を打つのか、まだ誰にもわからない。そのような先の読めない段階において、確乎として未来を語ることは不可能である。『看聞日記』の書きとめた巷説が不安定で、何か不吉な相貌を帯びるのは、おそらくはそのためだ。

以上のような説明も可能だろうか。……いや、語ろうと思えば、未来はいかようにも語ることができる。

問題なのは『看聞日記』の時代、神々の約諾という予定調和的な枠組みそのものが意味を失っているように見えることである。中世の国家権力を支えてきた神々のそれぞれが力を失ったわけではない。少なくとも巷説のなかで、神々はなお次代の権力者に王権を授与する権利と権限を留保している。そうではなくて、世界を支える予定調和的な枠組み、つまりは神々の約諾という、世界の神話的な構造そのものが失われているように見えるのである。

日付の一日ずれる⑩の記事は、あるいは神祇官の荒廃を——室町將軍の加護者、北野天神すら立ち去った神祇官の荒廃を、語っているのかもしれない。

雨降入夜暴風甚雨、雷鳴、後聞、大風雨之時分、神祇官松明おひた、しくみえて、四五千人許相集、暫有てトツト咲テ退散、松明火人ニ見之実説也、諸神会合歟、天狗野干所為歟、不思議也、

という語りは、神祇官における神々の会合の後日談として、願ってもない劇的な余韻をとどめるものだろう。暴風雨のさなかに神祇官を埋め尽くした四五千の集団は神々だったのか。室町殿の悲劇を哄笑して退散したとすれば、天狗野狐の類だったのか。すでに神祇官に神々の姿はなく、どのような未来図が示されることもない。

註

- (1) 西山克「怪異学研究序説」(『関西学院史学』二九、二〇〇二年)。
- (2) 東アジア怪異学会編『怪異学の技法』(臨川書店、二〇〇三年)。怪異学と怪異についての私自身の考え方については、『技法』の序章にあたる西山「怪異のポリテクス」を参照されたい。
- (3) 東アジア怪異学会編『怪異学の可能性』(角川書店、二〇〇九年)。
- (4) 石原比伊呂「准摂関家としての足利將軍家——義持と大嘗会との関わりから」(『史学雑誌』一一五—二、二〇〇六年)・同「足利義持と後小松「王家」」(『史学雑誌』一一六—六、二〇〇七年)。伊藤喜良『足利義持』(吉川弘文館、二〇〇八年)、大田壮一郎「室町殿権力の宗教政策——足利義持期を中心に」(『歴史学研究』八五二、二〇〇九年)などを挙げておく。
- (5) 大田壮一郎「室町殿権力の宗教政策——足利義持期を中心に」(4)。

- (6) 西山克「室町時代宮廷社会の精神史―精神障害と怪異」(東アジア恠異学会編『怪異学の可能性』(3)を参照のこと。
- (7) 小坂真二氏「三合の算出法について」(『日本歴史』三八三、一九八〇年)。
- (8) 西山克「皇統と亀」(東アジア恠異学会編『亀ト』臨川書店、二〇〇六年)。
- (9) 池田知久「中国古代の天人相關論―董仲舒の場合」(宮嶋博史編『世界像の形成』東京大学出版会、一九九四年)。
- (10) 中世・近世に継承されていく未来記の言説のなかに、馬が人語をしゃべる逸話が織り込まれていることがある。
- (11) 西山克『聖地の想像力』Ⅵ「夢見られた空間」(臨川書店、一九九八年)。